

主 題：神への信頼を失わない

聖書箇所：ピリピ人への手紙 1章19-21節

こうしてメッセージをさせていただけるまで聖書を学ばせてくださり育ててくださった多くの信仰の先輩たち、先生方、協力してくれた家族や信仰の友人たちに感謝するとともに、私を救い、みことばをもって救ってくださった神に感謝をします。今日のメッセージを神におささげできることを感謝します。

先ず、今日の聖書箇所であるピリピ1：19-21を読みます。今私は、新改訳聖書の第二版を見ているのですが、皆さんの中には訳の違う聖書をお持ちの方がおられるかもしれません。その場合、どこが違うのかを注意して見ていただきたいと思います。

「19 というわけは、あなたがたの祈りとイエス・キリストの御霊の助けによって、このことが私の救いとなることを私は知っているからです。

20 それは、私がどういふばあいにも恥じることなく、いつものように今も大胆に語って、生きるにしても、死ぬにしても、私の身によって、キリストのすばらしさが現わされることを求める私の切なる願いと望みにかなっているのです。

21 私にとっては、生きることはキリスト、死ぬこともまた益です。

さて、この手紙を書いたときのパウロは非常に困難な状況にいました。ピリピ1：12-21を中心に、その背景を少し説明させていただきます。先ず、1：13をご覧ください。「私がキリストのゆえに投獄されている、ということは、親衛隊の全員と、そのほかのすべての人にも明らかになり、」とパウロが投獄されていたことが分かります。パウロが何か悪いことをして投獄されたというわけではなかったのです。イエス・キリストが救い主であり真の神であることを、パウロが大胆に語り伝えたために投獄されたのです。「キリストのゆえに」と書いているのはそのためです。

さらに、20節には「生きるにしても、死ぬにしても、」と書いています。22節以降にも書かれていますが、パウロは単に投獄されているだけでなく、死刑になるかもしれないという裁判がパウロには待っていたのです。投獄されている中でいつ呼び出されて裁判になるのか、また、裁判の結果によっては死刑が宣告されて殺されてしまうかもしれないという状況だったのです。パウロの手紙を見ると、パウロをさらに苦しめることがありました。15節から17節をご覧ください。特に、17節には「他の人たちは純真な動機からではなく、党派心をもって、キリストを宣べ伝えており、投獄されている私をさらに苦しめるつもりなのです。」とあり、パウロに敵対心、党派心をもって宣教する人たちがいたことが分かります。パウロを認めなかったのです。パウロ自身が「私を…苦しめるつもりなのです。」と言っているように、パウロに対する党派心を持った人たちは、パウロにとって苦しみであったのです。

パウロは投獄され、死刑になるかもしれない中で、しかも、党派心を持つ人たちがパウロを苦しめるというそのような状況にあったとパウロは述べています。もし、私たちがそのような状況にあるとするなら、皆さんいかがですか？何も悪いことをしていないのに投獄され裁判を受けて死刑になるかもしれない、そして、自分の働きは認められず、党派心をもった人たちからさらに苦しみを与えられている、「どうしてですか？」と怒る人もいるでしょう。嘆いたり悲しんだり、つぶやいたり、不平や不満が出るなど、そのようなことになるのではないのでしょうか？

このような困難な状況の中で、パウロは福音宣教を喜びとし、キリストのすばらしさが現わされることを願って生きることができました。どうしてそのようなことができたのでしょうか？今日はそのことをごいっしょに見ていきたいと思えます。

A. 神の助けを信頼した 19節

パウロは、どんな場合でも神は助けを与えることができるお方であることを信頼しました。これが一つ目のポイントです。19節の初めに「というわけは」という接続詞があります。これはギリシャ語の「ガー」で、原因や理由を表すことばです。別のことばでは「なぜなら」となります。その前の12-18節で言ったことを受けるのです。パウロは非常に困難な状況を受けて19節を書いているのです。そしてまた、パウロがここで言っている動詞は「…知っている」です。これは「オイダ（ギリシャ語）」ということばで「確信をもって何かを知ること」を意味します。だから、パウロが言わんとしたことは、「あなたがたの祈りとイエス・キリストの御霊の助けによって、このことが私の救いとなることを私は知っている」ということで、これが私の確信であるということピリピの人たちに伝えたのです。

19節にある「救い」とは何でしょう？これは聖書を学んでおられる先生方の中でもいろいろに意見が分かれるところです。その中でも、ここにある「救い」とは「解放」を意味すると考えられます。その理由を説明します。ここで使われている「救い」のギリシャ語は「ソーテリア」で、元々は「敵の手

に陥ったところから救出する、解放する」ということです。「からだの安全を保証する」、また、現在の私たち信徒が持っている救いのこと、そして、将来、キリストの再臨のときに私たちが受ける救いのことも指します。

この「救い」ということを考えたとき、パウロはすでに罪からの救いを得ていたし、精神的な救いが必要であったわけでもありません。だから、ここでは「罪からの救い」や「心の救い」という意味ではないことが分かります。それで、「救い」が「解放」と考える根拠を二つ述べます。

1) 旧約聖書からの引用であること

パウロは「私の救いとなる」と言っていますが、このことばはヨブ記13:16にあるヨブが話したことば「神もまた、私の救いとなってくださる。神を敬わない者は、神の前に出ることができないからだ。」の引用です。70人訳聖書ではパウロが書いたことばと一言一句一致しています。つまり、罪を犯していないにも拘わらず試練を経験していたヨブが「神もまた、私の救いとなってくださる。」と言ったように、神がパウロの解放、救いのカギとなるということを知っていると、パウロはそのことをピリピの人たちに伝えようとしたのです。これが一つ目の理由です。

2) 文脈から

1:12以降の文脈から見ると「救いが解放である」と考えられます。本来、「ソーテリア」というギリシャ語は「敵の手から救い出す、救出する」ということだと先ほど言いましたが、パウロの敵、すなわち、パウロを苦しめることに励んでいた党派心を持っていた人たちは、パウロに敵対心を持ち、パウロを苦しめるつもりでいました。しかし、パウロはこの19-21節の中で、現在、直面している困難からの解放、救いは「必ずあることを知っている」ということをピリピの人たちに伝えたのです。その中でも必ず神の助けがあり、今の困難な状況は一時的であって、必ず、神はみこころを成されるということをお伝えしたのです。22-26節を見ると、パウロは生きていて解放されても、また、死による解放で神のもとに召されたとしても、神がみこころを為すという確信をもってこの手紙を書き送ったのです。ですから、ここの「救い」は「困難な中からの解放」と考えられるのです。

むしろ、パウロがここで言いたいことは、パウロにとってこの困難な状況は一時的なもので、19節にある通り、「あなたがたの祈り」と「イエス・キリストの御霊の助け」によって、救い、つまり、解放されるということです。パウロには自分自身が生きていて解放が得られるのか、または、死んで神のもとに召されて神に仕えることになるのかというパウロ自身の救いのことよりも、パウロがここで関心をもって伝えようとしていることは「福音が広がること」です。それがパウロの「真の関心事である」と告白しているのです。

また、19節にある「このことが私の救いとなることを…」の「なること」ということばのギリシャ語は「結果的になる」という意味です。ですから、「このこと」というのは15-18節で言われていること「:15 人々の中にはねたみや争いをもってキリストを宣べ伝える者もいますが、善意をもってする者もいます。…:17 他の人たちは純真な動機からではなく、党派心をもって、キリストを宣べ伝えており、投獄されている私をさらに苦しめるつもりなのです。」という内容が含まれているのです。パウロが置かれている困難な状況に焦点が当てられていて、そこから解放される結果になると、そのことをパウロは言っているのです。

さて、19節でパウロは二つのことがパウロにとっての助けになると述べています。「あなたがたの祈り」と「イエス・キリストの御霊の助け」です。パウロはこれらを通して与えられる神の助けを信頼したのです。

1. **あなたがたの祈り** : 私たち救われたクリスチャンは神に祈ります。パウロが投獄されたと聞いたピリピの人たちは当然祈ったでしょう。でも、その祈りは私たちの願いを押し付けるような祈りではないはずです。私たちの祈りは神への礼拝です。神のみこころが最善であるゆえに、神のみこころが成りますようにという祈りを私たちはします。もちろん、そのことは聖書が教えているし、パウロもよく知っていました。なぜなら、私たちは神のみこころに適う祈りをするときに、神はみわざを成されるからです。ヤコブ書5:16に「ですから、あなたがたは、互いに罪を言い表し、互いのために祈りなさい。いやされるためです。義人の祈りは働くと、大きな力があります。」とあります。使徒の働き12章では、実際に捕らえられて牢に入れられたペテロに対して、12:5「…教会は彼のために、神に熱心に祈り続けていた。」と書かれています。ペテロは投獄されていたところから解放されたのです。

Ⅱコリント1章をご覧ください。パウロが祈りについてコリントの教会にどのように書いているのか? 8節から見ましょう。「:8 兄弟たちよ。私たちがアジヤで会った苦しみについて、ぜひ知っておいてください。私たちは、非常に激しい、耐えられないほどの圧迫を受け、ついにいのちさえも危くなり、:9 ほんとうに、自分の心の中で死を覚悟しました。これは、もはや自分自身を頼まず、死者をよみがえらせてくださる神により頼む者となるためでした。:10 ところが神は、これほどの大きな死の危険から、私たちを救い出してくださいました。また将来も救い出してくださいます。なおも救い出してくださいという望みを、私たちはこの神に置いています。:11 あなたがたも祈りによって、私たちを助けて協力してくださいませ。それは、多くの人々の祈りによ

り私たちに与えられた恵みについて、多くの人々が感謝をささげるようになるためです。」、パウロはこのように自分が受けた圧迫やいのちの危険の中にあっても「祈ってください」と言っているのです。

他にも、ローマ15：30「兄弟たち。私たちの主イエス・キリストによって、また、御霊の愛によって切にお願いします。私のために、私とともに力を尽くして神に祈ってください。」、エペソ6：19「また、私が口を開くとき、語るべきことばが与えられ、福音の奥義を大胆に知らせることができるよう私のためにも祈ってください。」と、パウロは繰り返して「祈ってください」と依頼しています。これは、パウロが自分が宣教の働きをする中で、兄弟姉妹の祈りが励ましであったということを示しています。神はみこころに適う祈りに答えてくださいます。パウロは祈りを通して成される神の助けを確信して、このピリピ人への手紙を書いたのです。私たちはどうでしょう？互いに兄弟姉妹のために、また、神の御前にみこころを求めて祈っているのでしょうか？パウロは神が助けを与えることのできるお方であることを知り、兄弟姉妹に「祈ってください」と依頼をしたのです。また、そのことを感謝しました。

2. イエス・キリストの御霊の助け：二つ目のことを見ていきましょう。「助け」はギリシャ語で「エピハラギア」で「必要を与える、惜しみなく与える」という意味です。聖霊は助け主です。私たち聖徒の必要を満たしてくださるのは聖霊なる神です。ここでは「イエス・キリストの御霊」と書かれています。なぜ、そのように書かれているのか考えてみてください。イエス・キリストは十字架に架けられる前に「助け主を聖霊として送る」と言われました。助け主が与えられるのです。

イエスはこのように言うておられます。ヨハネ14：16-17「:16 わたしは父にお願いします。そうすれば、父はもうひとりの助け主をあなたがたにお与えになります。その助け主がいつまでもあなたがたと、ともにおられるためにです。:17 その方は、真理の御霊です。世はその方を受け入れることができません。世はその方を見もせず、知りもしないからです。しかし、あなたがたはその方を知っています。その方はあなたがたとともに住み、あなたがたのうちにおられるからです。」と。また、使徒1：8では、イエスがオリーブ山から昇天される直前に弟子たちに話されたのはこういうことでした。「しかし、聖霊があなたがたの上に臨まれるとき、あなたがたは力を受けます。そして、エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、および地の果てにまで、わたしの証人となります。」と、聖霊が助け主だと言われました。パウロはイエス・キリストの御霊の助けがあることを知っていたのです。

それゆえに、私たちもすでに学んだところですが、ガラテヤ人への手紙の中でも、聖霊は単に与えられるだけでないことを教えています。5：16、22-23、25「:16 私は言います。御霊によって歩みなさい。そうすれば、決して肉の欲望を満足させるようなことはありません。」、「:22 しかし、御霊の実は、愛、喜び、平安、寛容、親切、善意、誠実、:23 柔和、自制です。このようなものを禁ずる律法はありません。」、「:25 もし私たちが御霊によって生きるのなら、御霊に導かれて、進もうではありませんか。」と書かれています。

パウロは聖霊の助けにより神の力が与えられることを信頼したのです。私たちが困難な状況に遭遇したときに、自分の状況に対して周囲の人たちにつぶやいたり不平を言ったり神を疑ったりと、ちょうど、イスラエルの民がエジプトから荒野に出たときに問題が起こる度にそうであったように、問題に遭遇するときに私たちの心からこぼれ出そうになることばはつぶやきや疑いではありませんか？パウロは自分の状況を周囲の人たちにつぶやいたり神を疑ったりすることなく、神を信頼したのです。まさに、パウロはこの天地を造られた全知全能なる唯一真の神に助けを求めたのです。

都上りの歌である詩篇121：1-2に「:1 私は山に向かって目を上げる。私の助けは、どこから来るのだろうか。:2 私の助けは、天地を造られた【主】から来る。」とある通りです。私たちが困難な状況に陥ったとき、私たちは神の助けを求めることができるのです。

B. 神の約束を信頼する 20節

二つ目に、パウロが困難な状況の中で福音の宣教を喜び、キリストのすばらしさが現わされることを求めることができた理由は「神の約束を信頼した」ことです。20節には「それは、私がどういふばあいにも恥じることなく、いつものように今も大胆に語って、生きるにしても、死ぬにしても、私の身によって、キリストのすばらしさが現わされることを求める私の切なる願いと望みにかなっているのです。」とあります。神の約束を信頼したのです。パウロは自分自身の身によって神がキリストのすばらしさを現わしてくださるといふ神の約束を信頼したのです。聖徒は「神の作品であって、良い行いをするためにキリスト・イエスにあって造られたのです。」とエペソ2：10に書かれています。

また、聖徒は「地の塩、世の光」として神の栄光を現す命令をいただいているということが、マタイ5：13-16に「:13 あなたがたは、地の塩です。もし塩が塩けをなくしたら、何によって塩けをつけるのでしょうか。もう何の役にも立たず、外に捨てられて、人々に踏みつけられるだけです。:14 あなたがたは、世界の光です。山の上にある町は隠れる事ができません。:15 また、あかりをつけて、それを柵の下に置く者はありません。燭台の上に置きます。そうすれば、家にいる人々全部を照らします。:16 このように、あなたがたの光を人々の前で輝かせ、人々があなたがたの良い行いを見て、天におられるあなたがたの父をあがめるようにしなさい。」と、また、Iコリント6：19-20には「:19 あなたがたのからだは、あなたがたのうちに住まれる、神から受

けた聖霊の宮であり、あなたがたは、もはや自分自身のものではないことを、知らないのですか。:20 あなたがたは、代価を払って買い取られたのです。ですから自分のからだをもって、神の栄光を現しなさい。」と、このように書かれています。皆さんがよくご存じのところですよ。

注意して見ていただきたいのは、パウロはここで「私は」とは言わず「あなたがたは」と言っています。つまり、イエス・キリストにあって罪赦され救われた聖徒ひとり一人、すべての人がこのように「自分のからだをもって、神の栄光を現しなさい。」という命令を受けているし、また、神の作品として良い行いを備えてくださっているという神の約束がそこにあるのです。ですから、パウロは神の約束を信頼したのです。

20節は「それは、」ということばで始まり「かなっているのです。」ということばで終わっています。ということが「かなっている」のでしょうか。「あらゆるしかたで、キリストが宣べ伝えられていること」が「キリストのすばらしさが現わされることを求めるパウロの願いにかなう」ということです。パウロの願いは「福音宣教」でした。イエス・キリストのすばらしさが現わされることを願っていたパウロのその願いが、福音宣教によってかなうということを行っているのです。

もう少し細かく見ると、「私の切なる願いと望み」ということばは二つのことばを重ねています。「切なる願い」と「望み」に分かれます。「切なる願い」はギリシャ語で「アパカラダキア」と言い、余り使わないことばです。これは「前へ」と「頭を」と「見ようとする」ということばの合成語です。「首を伸ばして一生懸命待ち切れない思いで待っている」様子を表わします。一生懸命そのことを願い心から切望しているのです。聖書の他の箇所でもこのことばが使われているのはローマ8:19です。「被造物も、切実な思いで神の子どもたちの現れを待ち望んでいるのです。」と同じことばが使われていますが、いずれにせよ、「心から強く願う」ということを意味します。もう一つの「望み」ということばも「願い、希望、期待」を意味し、パウロはここで二つのことばを重ねることによって、どれ程パウロがそのことを切に願っているのかということを表しています。パウロが切望したことは何か？それは20節に書かれている「キリストのすばらしさが現わされること」です。

ここで皆さんにお尋ねします。このことばは聖書によって訳が違います。新改訳聖書第二版では「現わされることを」、「新改訳聖書第三版」と最近出た「2017年版」も、また「口語訳聖書」では「あがめられる」です。皆さんがお使いの聖書はどれでしょう？なぜ、このように違うのか？パウロがここで何を言いたかったのかということを確認しましょう。この「現わされる」「あがめられる」と訳されていることばはギリシャ語で「メガルノ」ということばです。ギリシャ語の辞書では(1)大きくする、(2)はっきりさせる、(3)尊重する、ほめたたえる、ということばです。ですから、「現わされる」でも「あがめられる」でも間違いではありません。

聖書で他にこのことばが使われている箇所を調べました。ルカ1:46には「マリヤは言った。「わがたましいは主をあがめ、」とあり、この「あがめ」が「メガルノ」です。他に、使徒の働きには5:13「ほかの人々は、ひとりもこの交わりに加わろうとしなかったが、その人々は彼らを尊敬していた。」、10:46「彼らが異言を話し、神を賛美するのを聞いたからである。…」、19:17「このことがエペソに住むユダヤ人とギリシャ人の全部に知れ渡ったので、みな恐れを感じて、主イエスの御名をあがめるようになった。」とあり、これら「尊敬して」「賛美する」「あがめる」がそのことばです。つまり、「キリストがはっきりと現わされてあがめられるようになること」をこのことばは意味するのです。

「大きくする」というのが元々の意味だと言いました。皆さんはもうこのことばをよくご存じです。なぜなら、小さいことを「ミニ」と言い、大きいことは「メガ」と言います。大きく声を拡大するのは「メガホン」です。この「メガルノ」は「大きくはっきり見せること」を意味するのです。そうすると、第二版の訳が近いかと思って今日は第二版を読み直しました。こういうことです。私は仕事で「胃カメラ」をしますが、胃カメラで胃の中にピロリ菌がいるかどうか、ガンが起ころうかどうかなどがかなり分かるようになってきました。普段見えないものがしっかりとはっきりくっきりと分かるのです。ですから、検査を受ける方に「この検査は辛いですが、胃の中の様子がはっきり分かって、ガンの有無が分かり、ピロリ菌が見つければ退治ができるから、検査を受けましょう」と勧めます。

ムーディー教会のウォーレン・ワーズビー先生が書いておられることを引用すると、「メガルノとは遠くにおいて見えないものを、たとえば、望遠鏡でしっかり見ること、「星」は普通に見ると点だが、天体望遠鏡で見ると、土星や木星がきれいな鮮やかな形で見えること」と、こういう様子のことです。たとえば、メガネのレンズでも、普通は見えにくい小さなものをくっきりと見えるようにさせる、これが「メガルノ」です。

つまり、パウロがここで言いたかったことは何か？パウロは自分の身によって、イエス・キリストがどういうお方か？救い主か、真の神であるのかをはっきりと示したかったのです。神のことを信じていないこの国の人たちにとって、イエス・キリストは有名かもしれませんが、2000年前の、しかも、

イスラエルの国の人です。私たちが今直接お会いして話すことはできません。でも、クリスチャンがイエス・キリストを信じる者としてイエスの教えに従って歩むなら、パウロが言うことばを借りるなら、自分の身によってはっきりとキリストを現わすなら、周りの人たちは、イエス・キリストがどのような救い主であり真の神であるかを知ることになる。そして、キリストを崇めるといことです。このことをパウロは願ったのです。パウロのことばや行いのすべてによって、キリストのすばらしさが人々にはっきり現わされてキリストが崇められることです。

かつてのパウロは、イエス・キリストに敵対する者でした。聖徒を迫害しました。しかし、救われた後のパウロは、神が自分の身によってキリストのすばらしさをはっきりと現わしてくださることを切望したのです。また、パウロは神がパウロを通してキリストのすばらしさをはっきりと現わされるという約束を信頼しました。使徒 22 : 18 - 21 に「:18 主を見たのです。主は言われました。『急いで、早くエルサレムを離れなさい。人々がわたしについてのあなたのあかしを受け入れないからです。』 :19 そこで私は答えました。『主よ。私がどの会堂でも、あなたの信者を牢に入れたり、むち打ったりしていたことを、彼らはよく知っています。 :20 また、あなたの証人ステパノの血が流されたとき、私もその場において、それに賛成し、彼を殺した者たちの着物の番をしていたのです。』 :21 すると、主は私に、『行きなさい。わたしはあなたを遠く、異邦人に遣わす』と言われました。」とあり、26 : 9 - 20 でも同じように、神から約束と命令を受けたことを証しています。9 節「以前は、私自身も、ナザレ人イエスの名に強硬に敵対すべきだと考えていました。」、16 - 20 節「:16 起き上がって、自分の足で立ちなさい。わたしがあなたに現れたのは、あなたが見たこと、また、これから後わたしがあなたに現れて示そうとすることについて、あなたを奉仕者、また証人に任命するためである。 :17 わたしは、この民と異邦人との中からあなたを救い出し、彼らのところに遣わす。 :18 それは彼らの目を開いて、暗やみから光に、サタンの支配から神に立ち返らせ、わたしを信じる信仰によって、彼らに罪の赦しを得させ、聖なるものとされた人々の中にあつて御国を受け継がせるためである。』 :19 こういうわけで、アグリッパ王よ、私は、この天からの啓示にそむかず、 :20 ダマスコにいる人々をはじめエルサレムにいる人々に、またユダヤの全地方に、さらに異邦人にまで、悔い改めて神に立ち返り、悔い改めにふさわしい行いをするようにと宣傳伝えて来たのです。」

パウロは自分の身によってキリストのすばらしさが現わされることを願いました。そして、神がそのように約束してくださったことを信頼したのです。ですから、パウロはそのことについてここで三つの態度をピリピの人たちに伝えています。

◎キリストのすばらしさが現わされることについて、その態度

20 節「それは、私がどういふばあいにも恥じることなく、いつものように今も大胆に語って、…」

1) 恥じることなく : もし、私たちがイエス・キリストを恥とするなら、イエスの教えを恥とするなら、私たちは決してイエス・キリストを証することはできません。パウロはイエス・キリストを恥としないではっきり現わすことを願いました。ルカ 9 : 26 には「もしだれでも、わたしとわたしのことばとを恥と思うなら、人の子も、自分と父と聖なる御使いとのお栄光を帯びて来るときには、そのような人のことを恥とします。」とあります。ルカ 12 : 8 - 9 「:8 そこで、あなたがたに言います。だれでも、わたしを人の前で認める者は、人の子もまた、その人を神の御使いたちの前で認めます。 :9 しかし、わたしを人の前で知らないと言う者は、神の御使いたちの前で知らないと言われます。」、パウロはこのようにイエス・キリストのことを恥とすることをしなかったのです。むしろ、パウロは次のようにはっきり明言しています。ローマ 1 : 16 「私は福音を恥とは思いません。福音は、ユダヤ人をはじめギリシヤ人にも、信じるすべての人にとって、救いを得させる神の力です。」とパウロは「福音を恥としない」と言ったのです。

また、パウロはテモテに対しても繰り返してイエス・キリストを「恥としない」ことを告げています。Ⅱテモテ 1 : 12 「そのために、私はこのような苦しみにも会っています。しかし、私はそれを恥とは思っていません。というのは、私は、自分の信じて来た方をよく知っており、また、その方は私のお任せしたものを、かの日のために守ってくださることができると確信しているからです。」、そして、テモテへの勧めも為しています。

Ⅱテモテ 2 : 15 「あなたは熟練した者、すなわち、真理のみことばをまっすぐに説き明かす、恥じることのない働き人として、自分を神にささげるよう、努め励みなさい。」。私たちはどうでしょう？日々の生活の中で何かを恐れてイエスのことを話さないということはありませんか？

2) 大胆に : 二つ目の態度は「大胆に」です。これは「すべての」と「語る」ということばの合成語です。つまり、「確信をもって大胆に遠慮なく自由に語ること」です。パウロはこのように大胆に語ることを願いました。そして、パウロだけではなかった。イエス・キリストご自身の宣教にもこの「大胆に」が使われています。ヨハネ 18 : 20 には「イエスは彼に答えられた。「わたしは世に向かって公然と話しました。わたしはユダヤ人がみな集まって来る会堂や宮で、いつも教えたのです。隠れて話したことは何もありません。」とあり、ここでは「公然と」ということばに訳されています。

パウロがどうだったのか？使徒 9 : 27 - 28 「:27 ところが、バルナバは彼を引き受けて、使徒たちのところへ連れて行き、彼がダマスコへ行く途中で主を見た様子や、主が彼に向かって語られたこと、また彼がダマス

コでイエスの御名を大胆に宣べた様子などを彼らに説明した。:28 それからサウロは、エルサレムで弟子たちとともにいて自由に出はいりし、主の御名によって大胆に語った。)、彼は信じてすぐにこのようにキリストを大胆に証したのです。また、エペソの教会にもこのように願っています。エペソ6:19-20「:19 また、私が口を開くとき、語るべきことばが与えられ、福音の奥義を大胆に知らせることができるよう私のためにも祈ってください。:20 私は鎖につながれて、福音のために大使の役を果たしています。鎖につながれていても、語るべきことを大胆に語れるように、祈ってください。」と。パウロはイエスのことを少しも恥じることなく、何にも妨げられることなく公然とはっきりと語ることに、その態度を願ったのです。

さらに、この「大胆に」ということばを注意して見ると、この働きは聖霊の働きによって為されることが分かります。使徒4:13に「彼らはペテロとヨハネとの大胆さを見、またふたりが無学な、普通の人であるのを知って驚いたが、ふたりがイエスとともにいたのだ、ということがわかって来た。」とある通りです。4:29では「主よ。いま彼らの脅かしをご覧になり、あなたのしもべたちにみことばを大胆に語らせてください。」と、4:31には「彼らがこう祈ると、その集まっていた場所が震い動き、一同は聖霊に満たされ、神のことばを大胆に語りだした。」とあります。確かに、パウロが語り聖徒が語りました。でも、このように大胆に語らせてくださるのは聖霊なる神です。パウロはこの神の約束を信頼しました。それゆえに、パウロは恥じることなく大胆に語る事ができたのです。

3) いつものように今も : 「いつも、常に」という意味です。先ほど見たように、パウロは信じた後すぐに大胆に語り始めました。そして、ピリピ書に戻って、1:13には「私がキリストのゆえに投獄されている、ということは、親衛隊の全員と、そのほかのすべての人にも明らかになり、」と書かれていますが、だれが伝えたのでしょうか？パウロです。パウロは投獄されていてもいつものように今も語り続けたと言うのです。Ⅱコリント4:5では「私たちは自分自身を宣べ伝えるのではなく、主なるキリスト・イエスを宣べ伝えます。私たち自身は、イエスのために、あなたがたに仕えるしもべなのです。」と述べています。

パウロは投獄されて死刑になるかもしれないという裁判を待っている中でも、ローマの親衛隊にイエス・キリストが救い主であり神であることをはっきりと伝えました。私たちはどうでしょうか？私たちは自分の家族や友人に「私はイエス・キリストを信じ従うことにした。イエス・キリストこそが救い主であり、真の唯一の神なのだ。」と伝えたかもしれません。でも、私たちはパウロがしているように「いつものように今も」語り続けているのでしょうか？

パウロは神の約束に信頼しました。だから、「恥じることなく大胆にいつものように今も」語り続けたのです。パウロは自分の語ることが「うそ偽りのない真実」であることを知っていました。ですから、パウロのどの書簡を見ても彼のことは変わることがないのです。彼は神のことばを語ったのです。

さて、もう一つこの20節で注意することばは「キリストのすばらしさが現わされる」と受け身で書かれていることです。パウロは決して「私がキリストのすばらしさを現わす」と述べていません。パウロは「私の身によって、キリストのすばらしさが現わされることを」と言いました。受け身なのです。言い換えるなら、私たちは自分でキリストのすばらしさを現わすのではなく、神が私たちを通してそのことを成してくださるということを使ったのです。今までに何度もお聞きになったことと思いますが、私もこの教会で信仰の先輩方からこのような例えを聞きました。月は自分自身で光ることができません。月は太陽の光を受けて輝きます。夜に私たちを照らします。あるときは満月できれいに太陽の光を反映させます。あるときには三ヶ月になったりします。満ち欠けがあります。

私たちがキリストのすばらしさを現わそうと神が私たちに働きを為されるときに、私たちの信仰の状態によって、満月のように神のすばらしさを反映させるのか？それとも、三ヶ月のように、あるいはもっと小さく、ほとんど現わさないようになっていないか？私たちに心の罪はないのでしょうか？神を信じ信頼しているのでしょうか？確かに、神は私たち聖徒を通して、キリストのすばらしさを現わしてくださる、神の作品として用いてくださるという約束があります。でも、私たちがキリストのすばらしさを現わすことを願い、また、神の約束を信じているという、その信仰の状態をチェックしないなら、私たちの信仰が風邪を引いた状態なら、私たちは神の栄光を現すこと、イエス・キリストのすばらしさを現わすことはできないでしょう。私たちを通してイエス・キリストのすばらしさを周りのイエスを知らない人たちにはっきり示すことができなくなります。

この二つ目のポイントは、パウロは神から与えられた約束に従って、パウロの身によってキリストのすばらしさが現わされるという約束を信頼したということです。私たちは神から与えられている約束を信頼しているのでしょうか？

C. 神のみこころを信頼する 21節

パウロが困難な状況の中で福音宣教を喜び、また、キリストのすばらしさが現わされることを願っていたことの三つ目のポイントは、「神のみこころを信頼する」ということです。パウロは神のみこころこそが最善であることを知っていました。それゆえに、パウロは神のみこころを信頼しました。こう述べ

ています。20節では触れませんでした。「生きるにしても、死ぬにしても、」と言っている通り、21節でも言います。「私にとっては、生きることはキリスト、死ぬことも益です。」と。

この「益」ということばは、テトス1：11では「彼らの口を封じなければいけません。彼らは、不正な利を得るために、教えてはいけないことを教え、家々を破壊しています。」と「利」と訳されています。また、ピリピ3章にもこのことばがありますが、ここでパウロの変化を見ることができるのでご覧ください。3：7-8ですが、ここでパウロは「得」と言っています。「：7 しかし、私にとって得であったこのようなものをみな、私はキリストのゆえに、損と思うようになりました。：8 それどころか、私の主であるキリスト・イエスを知っていることのすばらしさのゆえに、いっさいのことを損と思っています。私はキリストのためにすべてのものを捨てて、それらをちりあくと考えています。それは、私には、キリストを得、また、」と。この流れを知るために4-6節を見てください。「：4 ただし、私は、人間的なものにおいても頼むところがあります。もし、ほかの人が人間的なものに頼むところがあると思うなら、私は、それ以上です。：5 私は八日目の割礼を受け、イスラエル民族に属し、ベニヤミンの分かれの者です。きつすいのヘブル人で、律法についてはパリサイ人、：6 その熱心は教会を迫害したほどで、律法による義についてならば非難されるところのない者です。」と。

パウロにとってはキリストがすべてあり生き甲斐であったのです。パウロは他の箇所でも「けれども、私が自分の走るべき行程を走り尽くし、主イエスから受けた、神の恵みの福音をあかす任務を果たし終えることができるなら、私のいのちは少しも惜しいとは思いません。」(使徒20：24)と言っています。また、パウロだけではありません。ローマ14：7-9「：7 私たちの中でだれひとりとして、自分のために生きている者はなく、また自分のために死ぬ者もありません。：8 もし生きるなら、主のために生き、もし死ぬなら、主のために死ぬのです。ですから、生きるにしても、死ぬにしても、私たちは主のものです。：9 キリストは、死んだ人にとっても、生きている人にとっても、その主となるために、死んで、また生きられたのです。」と、ここでパウロは「私は」とは言わず「私たちは」が主語です。

つまり、イエス・キリストを信じ救われた聖徒のみながこうであるということです。「だれひとりとして、自分のために生きている者はなく、また自分のために死ぬ者もありません。」とパウロは言っています。ガラテヤ2：20でも「私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。いま私が肉にあって生きているのは、私を愛し私のためにご自身をお捨てになった神の御子を信じる信仰によっているのです。」と、つまり、パウロにとっての生き甲斐はイエス・キリストであり、キリストがパウロにとってすべてでした。「生きることはキリスト」と記したパウロには、イエス・キリストが生きる喜びであり生きる目的であり、生きたいと願う力の源であったのです。パウロのどの手紙、どのことばを見ても、いつもパウロはキリストのために生きており、周りの人たちもパウロがキリストのために生きていることをはっきり認めていたのです。

パウロにとってまさにキリストが人生のすべてであった、お金も労力も人生のすべてを尽くしてキリストのために生きました。まさに「心を尽くし思いを尽くし力を尽くして」、人生のすべてにおいて救い主イエス・キリストのために生きたのです。イエス・キリストを愛したのです。パウロは「死ぬことも益です。」と言いました。かつては、同じことを「得」だと思っていました。神はパウロに全く新しい心、新しい価値観、新しい考えを与えただけでなく、新しい生き方を与えられました。

神はパウロのうちに新しい心を与え、志を立てさせて、みこころに沿った新しい生き方をしたいという、そのような願いを起こしたのです。それゆえ、パウロは神のみこころを信頼しました。神のみこころがパウロにとって最善であり、そのときは分からなくても、生きることも死ぬことも神にゆだね信頼したのです。かつてのパウロは「行いによる義」を追い求めていました。キリストに反対する者でした。しかし、パウロの人生は神によって全く変えられたのです。「生きることはキリスト、死ぬこともまた益です」と。

人によってその生き甲斐はいろいろあります。私の周りにも様々な生き甲斐を持っている方々がいます。医学の研究が好きな人は仕事を越えて、そのための勉強をすることや研究に没頭することが生き甲斐なので、夜遅くまで起きていて朝早く仕事に出かけることも苦にならないのです。釣りが趣味というよりそれが生き甲斐の人は、朝の3時から起きて出かけます。釣れなくても満足なのです。私の知人はピアノなどの芸術が生き甲斐です。その人にとってはお金や労力や時間などすべてをつぎ込んで、心の焦点はそこに向いたまま、人生のすべてをささげてそのことをしたいとします。

私にとっては、生きることは『 』、死ぬこともまた益です。パウロはこの『 』の中にキリストを入れました。先ほども触れたムーディー教会のウォーレン・ワーズビー先生は「ここに入れるあなたのことばは何ですか？」という問いかけをしています。ある人にとってこれは「お金」かもしれません。ある人には「地位」、「名誉」、「趣味」？皆さんのその『 』に入ることは何でしょう？ある人は「私にとっては、生きることはお金を得ることです。死ぬことはそれを無くすことです。」と、地位も名誉も死ぬことですべてを失います。パウロはそこに「キリスト」が入りました。それはパウロにとってキリ

ストが生き甲斐であり、いつまでも価値のあるものであったからです。趣味など、キリスト以外のものがそこに入るのなら、私たちは考えなければならないでしょう。

私たちはキリストによって救われ、イエス・キリストのために生きているのでしょうか？パウロだけではありません。私たちだけでもありませんでした。「クリスチャン」、キリスト者ということばを考えると、その人たちにとってはイエス・キリストが生き甲斐です。なぜなら、「キリスト者」と呼ばれたところはアンテオケでした。アンテオケの町で初めてクリスチャンと呼ばれるようになったのです。それは、イエス・キリストを信じ救われた人たちが教えられたことに忠実に従っていったからです。彼らのことを見たアンテオケの人たちに、キリストのすばらしさがはっきり現わされたのです。イエス・キリストにあって生きる人たちだと周りの人たちにはっきり伝わったのです。

クリスチャンには「キリストが生き甲斐」です。私たちは救われたことによって「イエス・キリストに愛をもって仕える奴隷」です。それゆえに、パウロは神のみこころを信頼しキリストを生き甲斐として歩み続けたのです。私たちはどうでしょう？神はパウロに新しい心だけでなく、新しい生き方も与えられました。神の愛によって救われたパウロは、自分の人生すべてにおいて神のみこころがあることを全く信頼し、神を愛して仕えました。パウロの人生は神の御手によって導かれ、支えられ、神の最善が成されることを信頼していたのです。ローマ8：28に「神を愛する人々、すなわち、神のご計画に従って召された人々のためには、神がすべてのことを働かせて益としてくださることを、私たちは知っています。」とある通りです。パウロはそのように神のみこころを信頼しました。

パウロは21節で「死ぬこともまた益です。」と言っていますが、なぜ、「死ぬことが益」なのでしょう？
(1) 報いが与えられるから : パウロは死を目前にしてこのように言っています。Ⅱテモテ4：6-8「:6 私は今や注ぎの供え物となります。私が世を去る時はすでに来ました。:7 私は勇敢に戦い、走るべき道のりを走り終え、信仰を守り通しました。:8 今からは、義の栄冠が私のために用意されているだけです。かの日には、正しい審判者である主が、それを私に授けてくださるのです。私だけでなく、主の現れを慕っている者には、だれにでも授けてくださるのです。」と。パウロは「報い」が与えられること、神がパウロに報いてくださることを知っていました。Ⅰコリント3：12-14には「:12 もし、だれかがこの土台の上に、金、銀、宝石、木、草、わらなどで建てるなら、:13 各人の働きは明瞭になります。その日がそれを明らかにするのです。というのは、その日は火とともに現れ、この火がその力で各人の働きの真価をためすからです。:14 もしだれかの建てた建物が残れば、その人は報いを受けます。」と書かれています。私たちの信仰生活が神の前に価値のあるものかどうか？そのことが問われるということです。

(2) パウロの願いは世を去ってキリストとともにいることだから : このことは22節以降に記されています。23節に「私は、その二つのものの間に板ばさみとなっています。私の願いは、世を去ってキリストとともにいることです。実はそのほうが、はるかにまさっています。」と、パウロは世を去ってイエス・キリストとともにいて主に仕えることが益だと証するのです。

ピリピ3：18-20には「:18 というのは、私はしばしばあなたがたに言って来し、今も涙をもって言うのですが、多くの人々がキリストの十字架の敵として歩んでいるからです。:19 彼らの最後は滅びです。彼らの神は彼らの欲望であり、彼らの栄光は彼ら自身の恥なのです。彼らの思いは地上のことだけです。:20 けれども、私たちの国籍は天にあります。そこから主イエス・キリストが救い主としておいでになるのを、私たちは待ち望んでいます。」と、私たちの国籍は天にあると言います。聖徒の国籍は天です。私たちはこのことを待ち望んでいるのです。パウロがこのように明言できたのは神のみこころを信頼していたからです。

もう一つ、21節から教えられることは、パウロには「生きるにしても死ぬにしてもキリストがすべてであった」ということです。パウロはそれほどまでにイエス・キリストを愛したのです。ピリピ1：1は「キリスト・イエスのしもべであるパウロとテモテから、」ということばで始まっていますが、そこでは「デュロス」ということばが使われていて、「キリスト・イエスの奴隷であるパウロとテモテから、」と言います。愛をもって自分自身の意志で神に仕える者になったということです。なぜなら、自分が救われた喜びから目が離せなかったからです。

パウロはまた、伝道においても「愛が動機」だと言っています。ピリピ3：16、17には「愛をもってキリストを伝え、」「純粋な動機から」ということばがあります。27節には「ただ一つ。キリストの福音にふさわしく生活しなさい。そうすれば、私が行ってあなたがたに会うにしても、また離れているにしても、私はあなたがたについて、こう聞くことができるでしょう。あなたがたは霊を一つにしてしっかりと立ち、心一つにして福音の信仰のために、ともに奮闘しており、」とあり、パウロは愛をもってキリストを伝えていた、それは「神の愛が動機」であると言ったのです。パウロはイエス・キリストへの愛ゆえに、自らのすべてをささげて仕えていたということです。それこそがパウロが為した霊的な礼拝でした。ローマ12：1-2「:1 そういうわけですから、兄弟たち。私は、神のあわれみのゆえに、あなたがたにお願いします。あなたがたのからだを、神に受け入れられる、聖い、生きた供え物としてささげなさい。それこそ、あなたがたの霊的な礼拝です。:2 この世と調子を合わせてはいけません。いや、むしろ、神のみこころは何か、すなわち、何が良

いことで、神に受け入れられ、完全であるのかをわきまえ知るために、心の一新によって自分を変えなさい。」。

パウロは、イエス・キリストの十字架の死と復活を通して現わされた神の愛と恵みに対して、神を愛し感謝して仕える人生を過ごしました。私たちは救いを与えてくださった主イエス・キリストに対してどのように応じるのでしょうか？神の愛や救いは無条件で私たちに与えられます。しかし、この与えられた愛にどのような心で応じるのでしょうか？神は私たちにはっきりと分かる形でその愛を示してくださいました。神が人として来られ、私たちの罪の代価として十字架で死んで三日目によみがえられました。イエスが「人がその友のためにいのちを捨てるといふ、これよりも大きな愛はだれも持っていません。」（ヨハネ 15：13）と言われたように、神は私たち人間が理解し得る最大の愛をもって私たちが愛してくださったのです。

それだけでなく、神は私たちとともにいてくださることが約束されています。私たちはときに自分のことをだれも分かってくれないと思ったり、悲しい思いが押し寄せても、神がともにいて私の心を知り、髪の毛の数まで知るほどに、私の過去、現在もともにいてくださって、ずっと愛を示し続けてくださっていることを知っています。私たちは愛をもって神に祈りをささげ、みことばを知って神に仕えることができるのです。

神の愛と感謝について考えるとき、以前、「教会とは」という学びでそこに書かれていない内容のことを思い出します。教会は建物ではなく召し出されたものの集まりであること、そして、その教会の働きは弟子作りであって、「伝道と教化」が二つの車輪だと言われ、汽車が蒸気で走るように、私たちクリスチャンは神への愛と救われた感謝がなければ動くことができないと教えられました。

パウロは「生きることはキリスト、死ぬこともまた益です。」と言いました。このことばにはパウロの神への愛、喜び、救われた感謝が溢れています。パウロは神の助け、神の約束、神のみこころを信じ、信頼しました。それゆえ、どのような状況の中にあっても、キリストのすばらしさが現わされることを願い、福音の前進を喜ぶことができました。パウロはどんな場合でも、自分を救い、新しい人生を生かして下さっている神を信じ、信頼して生きたのです。ピリピ4：11-13を見ましょう。「11 乏しいからこう言うのではありません。私は、どんな境遇にあっても満ち足りることを学びました。12 私は、貧しさの中にいる道も知っており、豊かさの中にいる道も知っています。また、飽くことにも飢えることにも、富むことにも乏しいことにも、あらゆる境遇に対処する秘訣を心得ています。13 私は、私を強くしてくださる方によって、どんなことでもできるのです。」、私たちが強くして働きをさせてくださるのは神であると言います。

パウロは「神の助け、約束、みこころを信頼して生きた」と言います。皆さん、困難な状況にあってもその中で今日学んだみことばを思い出してください。それは、私たちがどんなときも神への信頼を忘れないということです。アダムとエバが失敗したときはどうでしたか？彼らは神のことばを忘れたのです。イスラエルの民が不平やつぶやきを言ったときは？クリスチャンは、困難な状況の中で神の助けを信頼し、約束を信じ、神のみこころが最善であると信じてゆだねることができるのです。パウロのように…。イエス・キリストのすばらしさが現わされることを願いましょう。